

2023年12月10日（日）「暗黒の世に光が」

イザヤ 60:1-3

1 起きよ、光を放て。あなたの光が来て、主の栄光があなたの上に昇ったのだから。2 見よ、闇が地を覆い、密雲が諸国の民を包む。しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。3 国々はあなたの光に向かって歩み、王たちはあなたの曙の輝きに向かって歩む。

讚美歌 97 番

1.

朝日は昇りて 世を照らせり
暗きに住む人 来り仰げ
知恵に富みたる主 世に出でたり
愚かなる人は 来り学べ

2.

力に満てる主 世に臨めり
か弱き人々 来り恃め
安きを賜う主 世に降りり
苦しめる人は 来り受けよ

3.

救いを賜う主 世に生れぬ
高きも低きも 来り祝え
天地領す主 世に現る
萬のものみな どよみ歌え

アーメン

4年前からクリスマスキャロルの解説を説教にするという新たな取組みを始めましたが、今年もこのアドベントの機会を用いて語らせていただきます。今日は、先ほど礼拝の最初に歌った讚美歌 97 番を取り上げてみたいと思います。讚美歌の目次を見ますと、内容的に分類されていて、94～97 番は「待降」、98 番からは「降誕」となっています。待降節に歌われるのにふさわしい曲は一応 97 番までということになります。主イエスの来臨を待ち望みつつ、取り組んでまいりましょう。

1.

朝日は昇りて 世を照らせり
 暗きに住む人 来り仰げ
 知恵に富みたる主 世に出でたり
 愚かなる人は 来り学べ

ここでは主イエスが「朝日」に譬えられています。これは新しい時代の幕開けを意味します。比喩的な表現ではありますが、闇の世に生きる人々の苦悩とそこから解放される喜びを思わせます。主イエスが誕生されたのは、紀元前4～7年あたりと言われていて、その前後には様々な「光」を連想させる出来事が起きていました。占星術的にも何か大きな事件が起きる予兆が出ていたようで、東方から不思議な星を追ってやってきた訪問者たちがいました。また、夜番をしていた羊飼いたちに救い主の誕生を告げるため、光り輝く御使いが現れました。クリスマスの絵画には決まって闇夜に輝く星と御使いの輝きが描かれています。これは暗黒の世に希望の光が照り輝いたことをイメージさせます。

聖書は神の側から信仰の系図を辿る「表の」読み方もできますが、反対に神に反逆する勢力がどのように台頭していったかという「裏の」視点でも読むことができます。殺人を犯し神の許を去ったカインの末裔、ノアの子ハムの家系から出たカナン人の系譜、権力者ニムロデの子孫とバベルの塔。ここから出てきた人々が形成してきた世界は、神とキリストへの憎悪で満ち、優生思想に基づく戦争の仕掛けと大量殺人、金融支配による人民の奴隷化システムの構築、一部の人の繁栄と大多数の人の苦悩という結果をもたらしています。

第1世紀のユダヤ社会も例外ではなく、敬虔な宗教家を装った人々によって富が吸い取られる仕組みが作られ、旧約聖書をねじ曲げた法律によって庶民の生活を固く縛り付けていました。福音書に登場する「祭司長」「律法学者」「パリサイ人」「サドカイ人」と呼ばれる人々は、時の権力ローマ帝国にまでも影響力を持っていたことが分かっています。実際、ローマ総督までも彼らの扇動によって動かされてしまうほどでした。

このような暗黒の世に光として現れたのがイエス・キリストでした。主イエスは社会に蔓延る悪の本質を見抜き、悪魔の誘惑を斥け、悪魔と手を結んで権力を思いのままにしてきた人々と敢然と対決されました。しかし、その戦いは暴力によるものではなく、富の力によってもなく、神の国の支配をもたらしていくという別次元の方法によるものでした。主イエスは病と悪霊に囚われていた人々を解放し、神の国の支配が始まったという福音の宣言をもって新しい世界を構築していかれたのです。

現代においても「暗きに住む人」は変わらず存在します。苦しい社会情勢の下に生きていることだけを指すのではなく、人間の内的な心の闇をも意味するでしょう。神の国の支配の下にない生き方はすべて「暗きに住む」状態なのです。そのような人間のために「知恵に富みたる主」が来てくださいました。「愚かなる人」という表現は誰かを蔑んでいるのではなく、「神を知らずに生きてきた人」と解釈するとよいでしょう。

2.

力に満てる主 世に臨めり
か弱き人々 来り恃め
安きを賜う主 世に降りり
苦しめる人は 来り受けよ

「力に満てる主」とあります。主イエスが持つておられる「力」とは暴力でも経済力でもなく、神の御霊による力、真理と愛を語り行なう力、病を癒し悪魔の支配から人を解放する力です。この世界で一般的に「力」と考えられているものとはまったく異なる王として世に来られました。

「か弱き人々」とは、第一に「権力の下で苦しんでいる人々」とも言えるかもしれません。主イエスの時代にはこの世の権力による圧政から民を解放してくれる政治的メシアを求める向きがありました。人々は過去に栄えたダビデ王国の復興を目指し、この地にイスラエル王国を再建してくれるメシアの到来を待ち望んでいたのです。そして、それと思いき人物が現れる度に熱狂し、時にその人をリーダーに立ててローマ帝国に反旗を翻すこともありました。バプテスマのヨハネが現れたときにも彼に対する期待が高まりましたが、彼は自分はメシアではないと断言し、自分よりも更に優れた方が来られることを予告していました（ヨハネ 1:19-27）。ナザレのイエスが現れたとき、人々はその驚くべき御業を見て熱狂し、イエスを王にするために連れて行こうとしましたが、主はそれを拒まれました（ヨハネ 6:15）。十二弟子の念頭にも、主イエスがイスラエル王国をいつか復興させてくださるだろうという根強い期待があったようです（マタイ 20:21、使徒 1:6）。しかし、主イエスが実現しようとしておられたのは非暴力による「神の国の支配」であり、人が神との関係を回復し悪魔の支配から解放されることでした。人は生まれながらにして病んでいます。肉体的な弱さだけではなく、自分の中で統一を欠く部分がある。本来こう生きなくてはならないという思いがありながらそのように生きられない自分があることを、誰もが経験してきているでしょう。

私は救われる前、自分自身を受け入れることができずに苦しんでいました。自分のことがどうしても愛せなかったのです。生育環境のせいしていた時代もありますが、自分の中で問題を膨らませてきた責任があることに、ある時期気づきました。歪みのない自分、本当の自分とはどういう存在なのだろう。心の底から「良くなりたい」と願いました。そのとき、このような自分を救うことのできる方と出会ったのです。主イエスは私に「安き」を与えてくださいました。そのままの私を愛し受け入れてくださる方であることを知り、そこから先の人生を主の慰めと癒しに委ねようと思いました。自分の人格の歪んだ部分は、真実なる主イエスと共に生きることによってだんだんと良くなっていきました。「苦しめる人」とはまさしく私のことでしたが、私と同じように苦しんでいる人が多くいることを知り、伝道者になる決意をしました。自分が解放されたように、一人でも多くの人を救い主の許に連れて行きたい、良い医者を紹介したい（マタイ 9:12）、それが今の働きに就く動機だったのです。

3.

救いを賜う主 世に生れぬ
 高きも低きも 来り祝え
 天地領す主 世に現る
 萬のものみな どよみ歌え

ここまでの話をお聞きいただいて、「救い」とは本質的に人間の内的な問題について言っていることがご理解いただけたと思います。「高きも低きも」とは「身分の高い人も低い人も」という意味であり、主イエスの救いはどのような社会的立場にある人であっても受け取られるべきものであるということです。第1世紀、ペテロの働きを通してローマの百人隊長が福音を信じ（使徒10章）、パウロの宣教によって紫布商人ルデアという裕福な女性が信仰を持ちました（使徒16:14）。それに留まらず、ここでは地上の支配者もまた主の救いにあずかることが願われているでしょう。「天地領す主」、すなわち天と地を治め給う「神の国の王」として主イエスは誕生されました。神と人との関係を立て直し、更に人と人との関係も修復し、被造世界をも回復へと導き給うキリストの出現を喜び祝う、それがクリスマスであります。「萬のもの」とは、被造世界全体を表すことばであり、本来自然界が有する秩序さえも主イエスの手によって取り戻されることが暗示されています。主イエスは最終的に神の国をこの地に完成させると約束して天に戻られました。キリスト者はその日を待ち望みつつ、自分の内に与えられた神との関係に生き、神の国を宣べ伝え、この地に平和の種を蒔き続ける働きに従事するよう召されています。

しかし、現代においても、第1世紀と同じように「神の国」を「地上のイスラエル王国」と混同している人々がいることを最後に指摘しておきましょう。アメリカの政治を背後で支配しているネオコンは、パレスチナにイスラエル王国が完成することを目指し、最終的にはエジプトのナイル川からイラクのユーフラテス川までを含む「大イスラエル」を作る計画があります。岡山秀雄先生も2006年にJEAから出版された『原理主義』という冊子の中でこのことを指摘しておられます。1800年代後半から始まった「シオニズム運動」によって、「シオニスト」と呼ばれるユダヤ教改宗者たち（血縁的にはイスラエル人ではない）によるパレスチナへの入植が始まりました。そして、先住のアラブ人が武力によって追い出され、1948年にイスラエル国が建国されました。今回のイスラエル—ハマス戦争もその流れの中で起きた事件であり、アメリカ福音派の多くがイスラエルを支持するところには、大イスラエルが完成したときにキリストが再臨するという信念を持っているからです。この「ディスペンセーション主義」または「キリスト教原理主義」という立場は、イスラエル王国の再建のためならば核兵器の使用も辞さないという危険思想を含んでおり、およそ主イエスの「平和の福音」とはかけ離れたものです。

聖書の真理に立ち返るならば、主イエスが真に語っておられることは、第一に人が神との関係を取り戻し悪の支配から解放されることです。それによって与えられる心の平安は、この世の闇が如何に深まろうとも、私たちの内で光となって輝き続けます。

クリスマスを二週間後に控えておりますが、この待降節の日々をこのような意識で歩んでみてはどうでしょうか。

「既に 2000 年以上前に世に来てくださった主イエスは、現代に生きる私たちにも光を与えてくださった。この光なるキリストは、もう一度世に来られ、万物を新たに造り変えてくださる。主イエスの誕生を喜び、再臨による神の国の完成を待ち望みたい。」

一人びとりの心に揺るぎない信仰が与えられ、主イエスの光によって世に輝くことができますように。

【祈り】

救い主イエス・キリストの父なる神様。私たちの愛する主は、平和の福音を携えて争いの世に来てくださいました。神の国の王としての一貫した生き方をもって、権力や能力には依らない神の御霊による支配をもたらされました。私たちに与えてくださった罪の赦しの福音は、主の尊いいのちがささげられたことによって実現したものです。このまことの王の誕生を喜び祝います。そして、主が再び世に来られる日を待ち望みつつ、私たちも平和の種をこの世界に蒔き続けたいと思います。このアドベントの日々、主の恵みが全世界を覆いますように。争いのある地に平和をもたらしてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
混沌に秩序を、闇に光をもたらし給う、父なる神の愛、
朝日のごとく世に來り、神の国の平和をもって地を治め給う、主イエス・キリストの恵み、
罪の赦し、心の慰め、病からの解放、関係性の回復を与え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。